實業補習讀本

田尾小平次 編

巻一

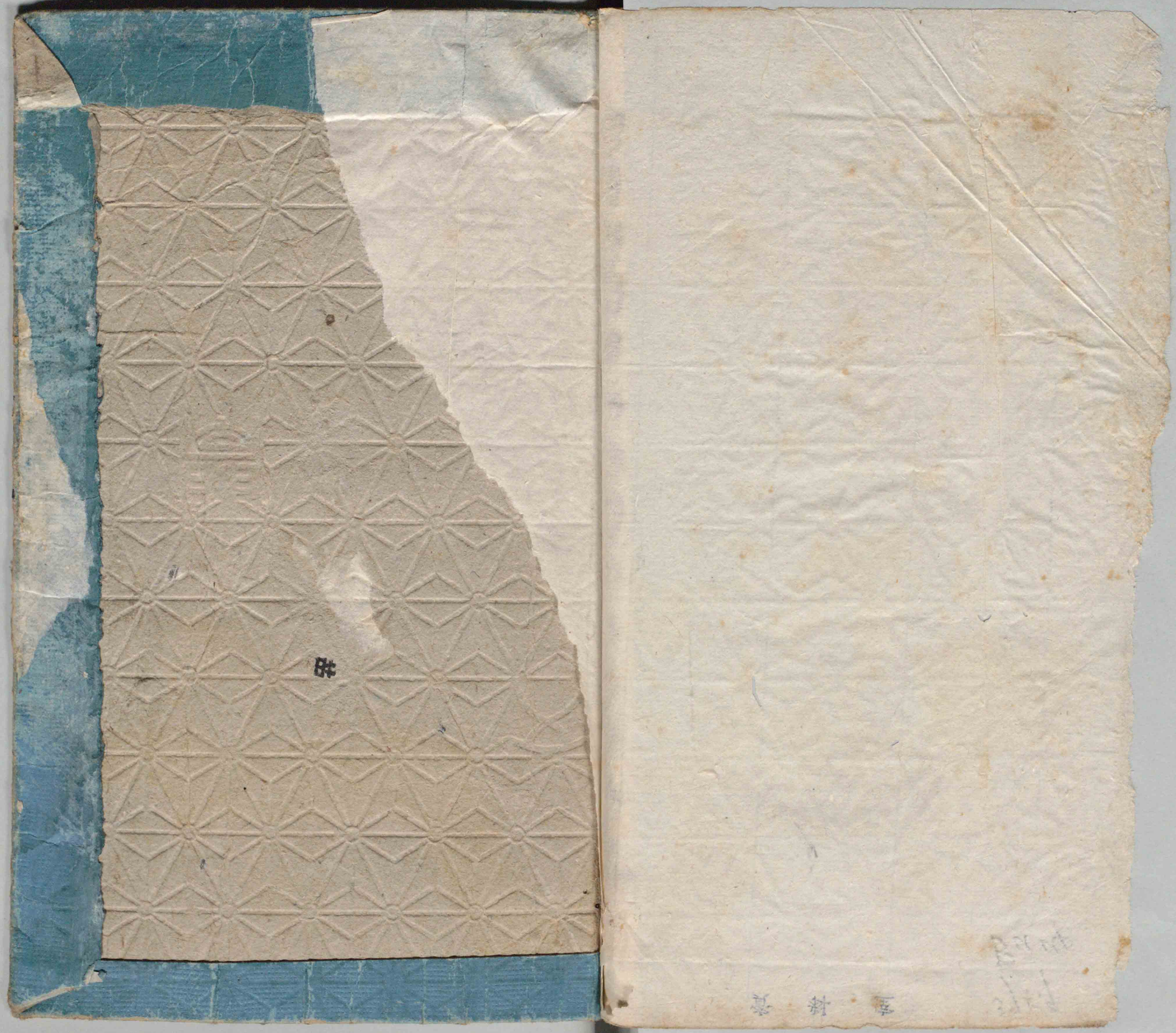
375.9
Bu14
資料室

30386

教科書文庫

3
810
44-1902
~~20000~~
~~35834~~

M35
1902
2000302705



實業補習讀本

廣島大學圖書之印
廣島大學教育
35834
資料室
375.9
Bu44

巻一目次

第一　春と少年　一
第二　歌時はこがね　二
第三　早起　三
第四　太陽　五
第五　花と花粉　六
第六　手紙　舟遊誘引の文　同返事　八
第七　蜜蜂　九
第八　養蠶　一〇
第九　勉強　一二
第十　砂糖　一四
第十一　食鹽　一五
第十二　歌時をたがへず　一七
第十三　源烏朝　一八
第十四　琉球　二〇
第十五　漁業の演習　二二
第十六　海水浴　二五
第十七　鯉　二六
第十八　手ノ働　二八
第十九　漆器　二九
第二十　陶器　三一
第二十一　瀬戸燒の祖　三二
第二十二　手紙　兄に贈る文　三四
第二十三　職業　三四

實業補習讀本卷一

第一　春と少年

今は、春の季節なり。向うの山にも、うしろの岡にも、桃櫻の花美しく咲き、野には、草青々ともえ出で、畑には、菜の花黄金を敷きたるが如く咲きみだれ、鳥は、歌ひさへづり、子供は、樂しげに遊べり。一年の中にて、春の季節ほど、其の景色の生き生きとして快きはあらじ。

人の一生を一年の季節にたとふれば、少年は、春の季節に當れり。されば、此の時において、志を立てゝよく勉強せば、其の智德の進むこと、草木

廣島大學圖書之印

の芽を出し、花を開くが如くなるべし。かくて成人して後、また草木の實を結ぶが如く、身を立て、家をおこし、遂には、國をも益することを得ん。されば、人は、少年の季節を空しく過すべからず。

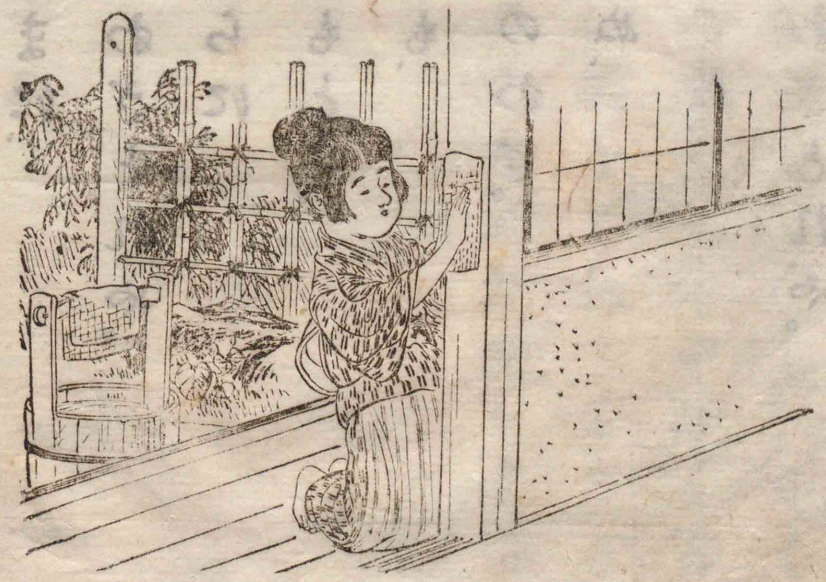
第二　歌

時はこがね
朝日まばゆくさし出でぬ、
草葉の露のきえぬまに、
とく〳〵おのがわざとれや。
時はこがねぞことさらに、
朝はこがねのみなもとぞ。
父うへ母うへ兄ぎみも、
みなとり〴〵の朝のわざ。
草葉の露もはやきえぬ、
朝日も高くさし出でぬ、
とくいそしみてわざとれや。

時はこがねぞ
ことさらに、
朝はこがねの
みなもとぞ。

第三　早起

毎朝五時に起くるときは、七時に目をさます人よりも、一日の中に、二



時間の得あり。これを、五十年の間につもれば、三萬六千五百時間の得となるべし。

朝早く起くるは、時間の得となるのみならず、精神・身體ともに、すこやかになりて、其のつとむべき業も、大にはかゆく

ものなり。ゆゑに、古人も、「早起は、家をおこすもとゐなり」と言へり。

人つねに、時の立ちやすくして、業の成りがたきを憂ふれども、時間は、よく用ふれば、餘りあるものなり。ゆゑに、よく勉むるものはいさゝかの時間をも、空しく過さゞるをもて、其の一日の業は、常の人の十日の業にもあたるべし。

されば、我等は、日々、太陽ののぼるとともに起き出でて、我が業を勉め、いさゝかも、時を空しくせざらんことを心がくべし。

第四　太陽

太陽ノ大サハ、何程アルト思ヒマスカ。大ナル皿ホドト思ヒマスカ。小サキ盥ホドト思ヒマスカ。太陽ハ、サヨーニ、小サイモノデハアリマセン。其ノ大サハ、此ノ世界ノ百二十五萬倍モアリマス。

太陽ハ、サヨーニ、大キイモノデアルノニ、我等ノ目ニ、小サク見エルノハ、コノ世界ト、太陽トノ隔タリガ、遠イカラデアリマス。

コノ世界ヨリ、太陽マデノ隔タリハ、凡ソ三千六百萬里デアリマス。ナント、大層ナ里數デハアリマセンカ。ドレホド大キイ物デモ、遠ク隔タリマスレバ、小サク見エルノガ、常ノ道理デアリマスカラ、太陽モマタ、皿・盥ホドニ見エルノデアリマス。

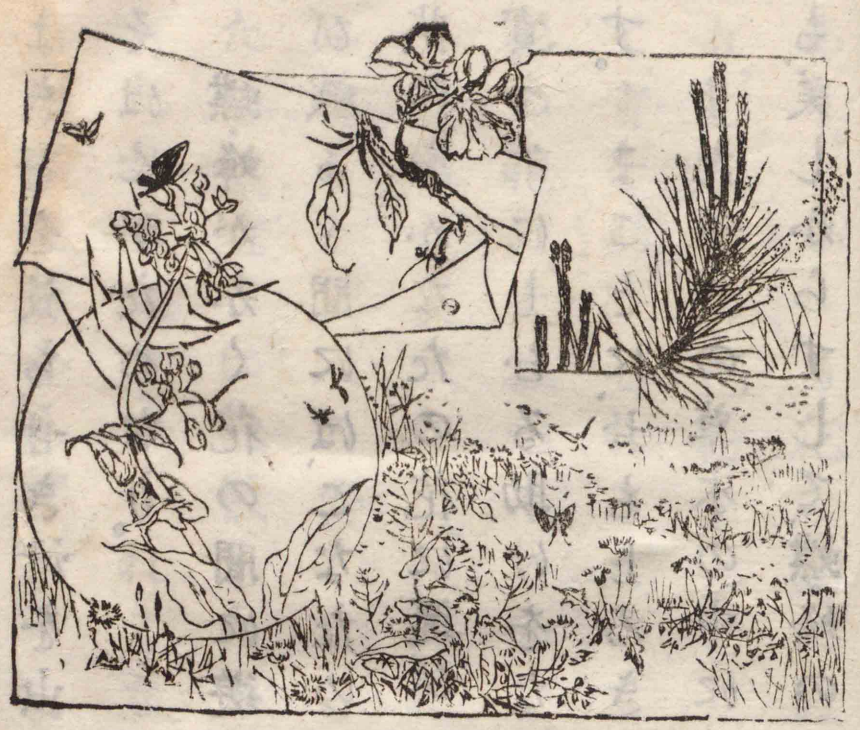
太陽ハ、コノ世界ニ、熱ト光トヲ與ヘテ、草木ヲ生長サセ、花ヲ咲カセ、實ヲ結バセ、雲ヲモ起シ、雨ヲモフラセマス。

マタ、此ノ世界ノ人類ヤ畜類ハ、皆太陽ノ熱ト光トニヨッテ、育ツモノデアリマス。モシ、太陽ノ光ヤ熱ガ、此ノ世界ニトヾカヌトキハ、コノ世界ハ、眞暗ニナッテ、物ノ色ハナクナリ、草木ハ枯レ、人類モ、畜類モ、皆死ニウセルコトニナリマセウ。

第五　花と花粉

春の野に出でて、花を手折り、草を摘むは、まことに樂しき遊びなり。然れども、いたづらに、これを手折り、これを摘むのみに止まるべからず。其の色形などをよく調べて、學問の助けとなすべし。花の花粉を傳ふるにつきて、面白き話あり、左に語らん。

すべて、花の色の美しきには、蝶・蜂の類の、爭ひつくものなり。春の日のうらゝかなる日、



野邊に遊ばゝ、數多の蝶・蜂は、櫻の花や、菜の花を尋ね、花より花に飛びうつりて、餘念なく戯るゝを見るならん。豆類の花の、蝶の形に似よりたるも、蝶などを招くものにて、

よき香を放ち、甘き汁を出すも、また、此等をさそはんがためなり。

蝶・蜂が、かく花の間に遊び戯るゝ間には、こなたの花粉を、かなたの花に運び實を結ばしむる助けをなす。

まことに、おもしろき仕組ならずや。

また、多くの草木の中には、花の形も、色も香も、美しからずして、蝶・蜂の類の、つかざるものあり。かゝる花の爲には、風がその助けとなり、こなたの花粉を、かなたの花に吹きおくりて、實を結ばしむるものなり。穀物、または、松・杉の花は、大抵かくの如し。

春過ぎ、夏來りて、松の花のさく頃、黄色の雨ふれりとて、人の驚くことあり。これは、風のために、空中に飛散したりし松の花粉の、雨に打たれて、地上に下れるなり。これ等のためしは、甚だ少からず。

第六　手紙

舟遊誘引の文

何川堤の櫻昨今花盛りのよし本日は休暇にもあり天氣もよろしく且つ川すぢにて端艇の競漕も催さるゝ趣に付舟遊を思ひ立ち候御同行いかゞ伺ひ上げ候御同意に候はゞ直ちに小生方へ御出で下されたく候

同返事

御手紙拝見いたし候今日は堤上の花見かたゞ舟遊御催しにつき御さそひ下され有りがたく存じ上げ候早速貴宅へ參上御同行いたすべく候

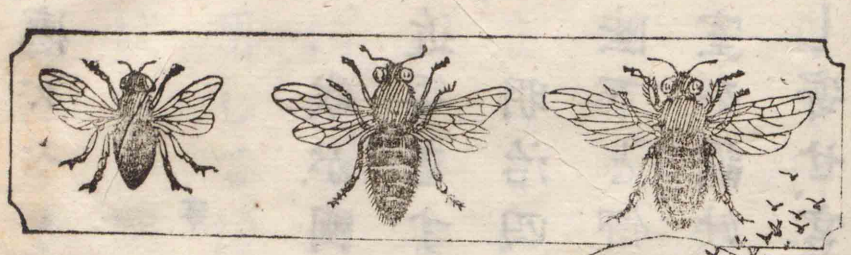
第七　蜜蜂

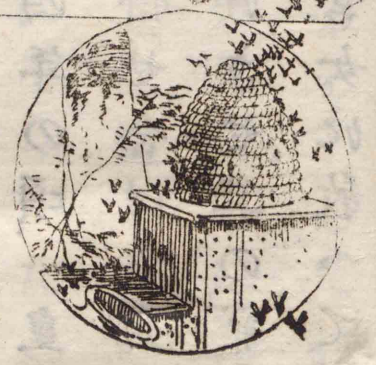
蜜蜂ハ、野山ニスミテ、大木ノウツロナドニ、巣ヲツクルモノナレドモ、又、人家ニカヒテ、巣

ヲ作ラシムルコトモ少カラズ。コレハ、蜜蜂ノ製スル蜜ヲ採ランガ爲メナリ。

蜜蜂ニハ、王蜂・雄蜂・工蜂ノ三種アリ。王蜂ハ、常ニ巣ノ中ニアリテ、スベテノ蜂ヲ支配シ、又、子ヲ産ムヲ務トス。雄蜂ハ、王蜂ヲ守ル。巣ヲ作リ、食物ヲ集ムル等ハ、工蜂ノ務ナリ。

工蜂ハ、王蜂・雄蜂ヨリ其ノ形小サケレドモ、其ノ羽強クシテ、ヨク飛ビマハリ、花ヲ見レバ、其ノ蜜ヲ吸ヒ取リ、巣ノ中ニ運ビ入レテ、年中





ノ食ニ供ス。一匹ノ集ムル所ハ、極メテ少ケレドモ、數千匹ニテ、怠リナク働クヲ以テ、多クノ蜂ヲ養ヒ、ナホ冬日ノ食料ヲ充分ニ餘スコトヲ得。

蜜蜂ノ巣ハ、多クノ室ニ分レ、各室皆六角形ヲナス。此ノ巣ヲ開キテ内部ヲ見バ、其ノ構造ノ巧ミナルハ、

感ズベキモノアルナリ。

第八　養蠶

我が國の養蠶は、古くより開けたる業にて、近年ますゝ盛になれり。

明治四年の頃、皇后陛下は、英照皇太后陛下と仰せ合はさせられ、吹上の御苑に養蠶室を設けさせ、其の業に長けたる者どもを召し寄せ、宮女に教へて蠶を養はせ、御躬みづからも、御手を下して、試みさせたまへり。それより後は、年ごとに此の事を行はせられて、全國の女子に、蠶を養ふわざを勵ましたまへり。まことに有りがたき御事ならずや。

今や、養蠶の業は、全國いたる所に行はれ、中には、廣大なる家屋を設け、あまたの工女を使用して、蠶を養ひ、糸を製するものあり。されば、我が國より外國に輸出する生糸は、其の數甚だ多くして、一年の金額三千六百萬圓に上

るといふ。

養蠶の業は、廣大の設けをなして營むにあらざれば、利益なしといふものにあらず。

一畝の桑を採りて、一籃の蠶を養ひても、其の事にだに心を注ぎなば、見事なる繭を得て、其の利益は、頗る多きものなり。されば、農家は言ふに及ばず、農家にあらずとも、桑を得る便りだにあらば、何人も、この業をつとむべきことなり。

第九　勉強

何事ニヨラズ、勉強セズシテ成就スルモノアル事ナシ。農夫ハ、耕作ニ勉強セザレバ、穀物ヨク實ノラズ。工人ハ、製造ニ勉強セザレ

バ、ヨキ物品ヲ作ルコトアタハズ。商人ハ、賣買ニ勉強セザレバ、其ノ店繁昌セズ。

我等ハ、今學校ニ出デテ、學問ヲナス者ナレバ、學業ヲ勉メハゲミテ、他日身ヲ立ツル基ヲツクラザルベカラズ。

サレドモ、一時ニ多クノ事ヲナシ得ベキニアラネバ、トキドキ心身ヲヤスメテ、勉強セザルベカラズ。ヨク勉メ、ヨク遊ブモノハ、眞ニ勉強スルモノナリ。ヨク勉ムトハ、一事ヲナサントスル間ハ、熱心ニ勉メテ、他ニ心ヲウツサヾルヲイフ。ヨク遊ブトハ、熱心ニ事ヲナシタル後、ホドヨク、心身ヲヤヌムルヲイフ。

常ニ怠ル人ハ、其ノ業ニ追ハルヽヲモテ、遊ブイトマナク、タトヒ遊ビテモ、決シテ樂シカラザルベシ。

何事ニテモ、始メヨリ、面白ミアルハ稀ナリ。面白ミナシトテ、中ゴロニシテヤメナバ、一ツトシテ、成就スルモノアルベカラズ。サレバ、

面白ミノ起ラザルハ、我ガ勉強ノ足ラザルナリト思ヒ、マスマス勵ミテ、イサヽカモ怠ルベカラズ。

モシ、ナスワザノ困難ナリト、覺エルコトアル時ハ、少シヅツタビタビ、コレヲクリカヘシテ習フベシ。カクノゴトクセバ、其ノ事遂ニハ容易クナリテ、オノヅカラ、進ミモ早ク、面白ミモ生ズベシ。

怠らずゆかば千里のはても見ん

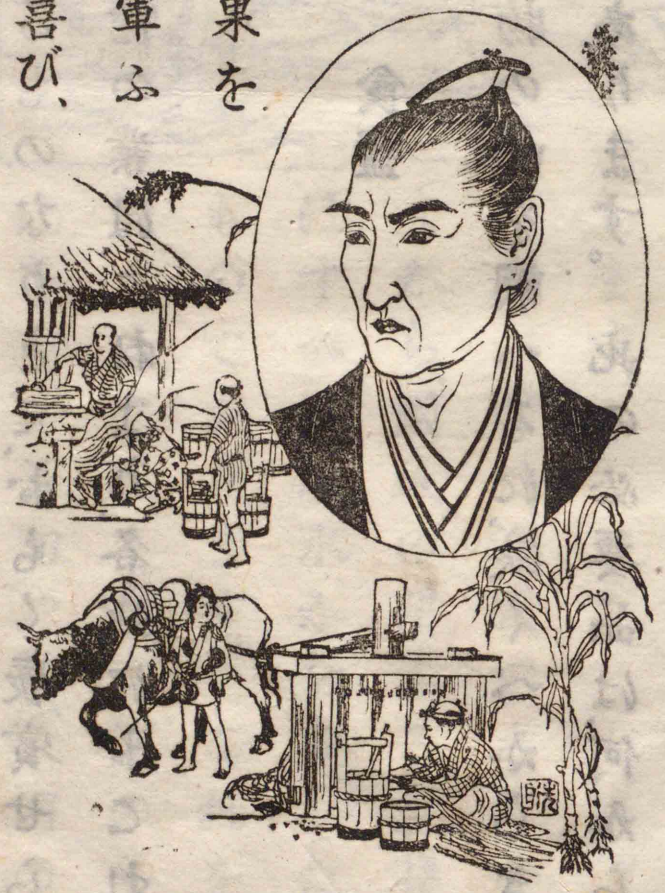
牛の歩みのよしおそくとも

第十　砂糖

砂糖は、多く甘蔗より製す。甘蔗は、其の形、とーもろこしに似たり。これを植うるには、莖のよく成長したるものを選みて、冬の間、砂中にうつみおき、春にいたり、とりいだして、一節づつに切り、これを畑に植ゑつくれば、生長して葉を生ず。

かくて、其の年の冬に至りて、これを刈り取り、莖より汁をしぼり取り、其の汁を煮つめて、更に精製すれば、白き砂糖を得。今より、凡そ百八十年前までは、我が國にて、いまだ砂糖を製する法を知らざりしかば、すべて外國よりの輸入を仰ぎたりしが、時の將軍吉宗、これをうれへ、甘蔗の苗を琉球より取りよせて、これを諸國に植ゑさせたり。されども、其の生長は、頗る宜しからざりけり。

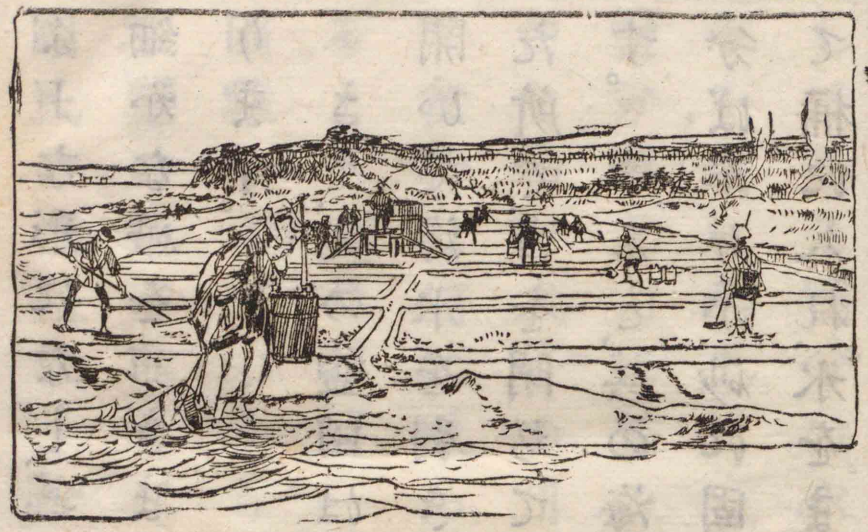
時に、平賀源内といふ人ありき。物産の學に精しかりければ、甘蔗の培養法と、其の製造法とを研究し、人にすゝめて、これを試みしめけるに、よき結果を得たり。將軍ふかく、これを喜び、



國益の大なるものなりとて、おもく褒賞せられたり。製糖の業は、これより、各地におこれりといふ。

第十一　食鹽

食鹽は、食物の味を調へるに、缺くべからざる必要品であります。此の必要品は、何から製するかといひますに、井鹽とて、鹹水の井から採るのもあり、又、岩鹽とて、坑から鹽塊を掘り取って、製するのもあるけれど、大抵は、海水から製します。



我が國は、海國でありますから、國民の用ふる食鹽は、すべて海水から製したものであります。これを製するには、まづ、海濱の平地を畦で仕切って、水田の

よーな形になし、其の底を、粘土で固めて、上に細かな砂を布きます。これが即ち鹽田であります。

さて、此の鹽田は、滿潮の時に、其の畦の口を開いて、海水を引き入れ、それが全く行き渡った所で、口を閉ぢて、數日の間、日光にさらします。すると、其の海水中の水分は、蒸發して、鹽分ばかりが、砂に固著します。此の砂を集めて桶に入れ、水をまぜてかき廻すと、其の固著して居る鹽分は、水に溶けます。そこで、其の水を釜に移して煮ると、水分は、悉く蒸發して、鹽分は、眞白に釜の中に凝り固まる。此の眞白な物が、我等の用ふる食鹽であります。

食物は、何に限らず、己の國の產出で、事足りるよーにせねば、一朝外國と事ある日に、頗る困難する事がありませう。然るに、我が國は、製鹽の地が所々にあって、此の必要な、食鹽が、國民の使用に十分であるのは、誠に喜ばしい

事であります。併し、製鹽業は、尚ほ此の上にも、盛にしたいものであります。

第十二　歌

時をたがへず　時をたがへず
春は去り、
秋はまた來る　あのかりがねよ、
親子はらから　つゐでのまゝに、
むつびかはして　なきわたる。

ちぎりわすれず　春は來て、
秋はまた去る　あのつばくらめ、
おのが友どち　問ひ問はれつゝ、
さもしたしげに　飛びあそぶ。
鳥だにやくそく　まもりつゝ、
おやはらからに　また友だちに、
おのづからなる　をしへをふみて、
まことの道を　たどるなり。

第十三　源爲朝

源爲朝は、武勇人にすぐれ、ならびなき强弓の名人なりき。十五歲の時、豐後國に在りて、みづから近國をうち從へ、鎭西八郎と名のり、武威を九州にふるひたり。

其の後、保元の亂おこりし時、爲朝たまたま上京したりければ、父に從ひて、崇德上皇の御所に馳せまゐれり。時に、年十九歲、身の丈七尺ありけり。

かくて、御所の軍議に必勝の策をすゝめたれども、用ひられざりしかば、西門を守りて、敵兵の來るをひきうけ、平清盛をうち退けて、兄義朝と戰ひたり。然るに、他門の戰やぶれて、上皇落ち行かせ給ひければ、今はこれまでなりとて、一方を打ち破りて、近江におもむき、民家にひそみ居て、きずを療治しけるに、遂に敵に見出されて、捕はれたり。

やがて、爲朝は、死罪に行はるべかりしを、朝

廷、其の武勇ををしませたまひて、伊豆の大島に流したまへり。此の時、臂の筋をぬかれたれども、弓をひく力は、なほおとろへざりき。

其の後、爲朝、大島に在りて、更に武勇をふるひ、多くの島々をうち從へて、領主のごとくになり、勢ますく盛なりければ、朝廷、伊豆の國司に命じ、兵船數十艘に、軍兵數百人をのせて、これを征伐せしめられたり。

爲朝これを見るより、一矢に寄手の兵船一艘を射しづめ、其の身は、二三の從卒と共に、大島をのがれ出でて、諸國の海岸をさまよひけるが、終に、琉球

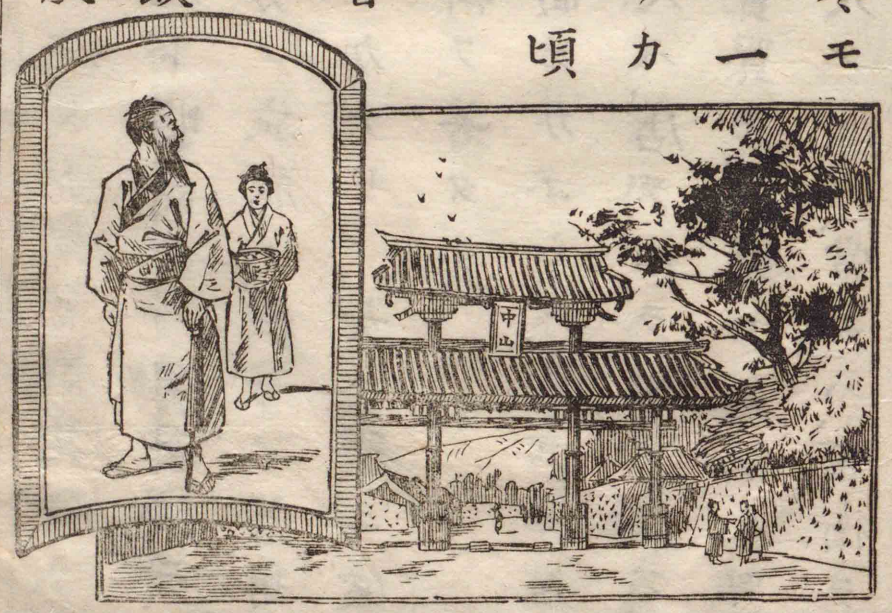
に渡りきといふ。

第十四　琉球

琉球ハ、沖繩ノ別名ナリ。大小ノ島々、五十アマリ並ビツラナリ、最モ大ナルハ、沖繩島ニテ、首里・那覇等ノ都會アリ。首里ハ、ムカシ、琉球王ノ都セシトコロ、那覇ハ、沖繩縣廳ノ在ル處ナリ。

氣候ハ、熱クシテ、絶エテ氷雪ヲ見ズ。草木ハ、常ニ青々ト茂リテ、冬モ葉ノ落ツルコトナシ。一二月ノ頃ハ、桃・櫻ノ花ザカリニテ、田植モ、マタ此ノ頃ナリ。

土人ノ常食トスル甘藷ハ、一年ニ二度ノ取リ入レアリ。四時常ニ蚊帳ヲ用ヒ、年中、大抵單衣



ヲ著ルナリ。

土人ノ風俗ハ、内地人ト略、同ジ。男女共ニ、髪ヲ結ビ、笄ヲサス。男ノ衣服ハ、我等ノ著用スル衣服ニ似テ、ユルヤカナリ。女ハ、腰ニ裳ヲマトヒ、上ニ長キ打掛ヲ著タリ。

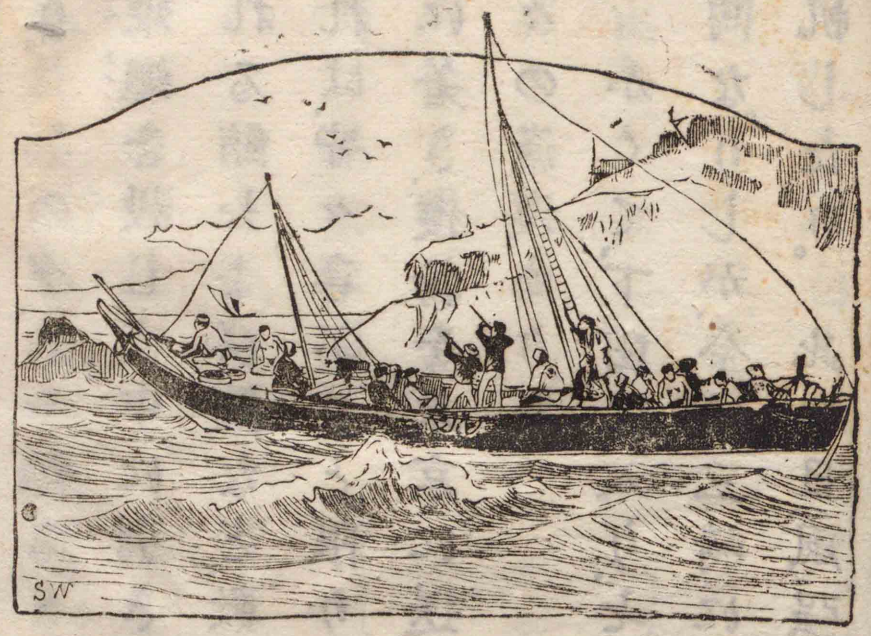
家屋ハ、石垣ニテ、前面ヲカコミ、外見、アタカモ城郭ノゴトシ。商人ハ、店ヲハラズ、スベテ、石垣ノ中ナル家ニテ賣買ス。家々ニ飼ヒ置カレタル豚ハ、内地ノ犬ノ如ク、常ニハ、市街ヲ歩キマハレリ。

此ノ島、近年ハ、漸ク開ケタレドモ、土人ノ中ニハ、今モナホ文字ヲ知ラザルモノ多ク、繩ヲムスビテ、勘定帳ノ代リトナスモノモアリトイフ。

第十五　漁業の演習

恰も、去年の今頃なりけり。我等は、まだ水産講習所の生徒なりしが、實地演習に出でん

とて、十二名の漁夫、三名の教師とともに、改良漁船にうち乗り、芝浦を勇ましく船出したり。をりしも、風荒く、船は、飛ぶが如くに走り、三時間にて、十里に餘れる三浦郡の三崎に著く。こゝにて、糧食漁具を載せ、更に出帆の用意したり。風を待ちて、伊豆の方へ走り、二日を經て、初島に著く。此の地、風景よし、人家四十二戸あり。いづれも、農業と漁業とを兼ねたり。をりふし、風の荒かりければ、船を島かげに廻



はして、三日が程こゝに泊り、持ち合せたる銃にて、空飛ぶかもめを射落しなどして、慰みたり。

やがて、風なぎたれば、帆を揚げて走ること四時間にて、網代に著き、翌日、大島に達せ

り。其の夕、島を離るゝこと七八里にして、鮪延縄を投じ、夜中に引き揚げしに、二十貫に餘れる鮪および鮫など、數尾を獲たり。初漁なれば、皆々喜ぶこと限りなし。それより、稻取に著き、獲物を東京に送れり。こゝにても、種々の漁獲ありき。

かくて、下田に入り、七島に漁すること五六回なりしが、今は、三崎に歸らんとて、下田を出帆したり。此の日、風強く吹き出で、大海原に怒れる浪、白く立てり。すは、荒れ出したりと、皆々勇をふるひて、浪ふせぐ用意をなす。晩食の頃は、いよ〳〵荒れまさりて、椀に盛りたる飯・汁、殘らずこぼれたり。帆を下ろして走るに、日は暮れて、城が島の燈明、かすかに見えたれば、皆

々大に喜びぬ。其の日、三十五六里の海路を、六時間にて三崎に著きぬ。最も危險なりしは、城が島と三崎との間なる瀬戸なりき。こは、漁船のしば〳〵破損する所にて、岩うつ浪はげしく、殆ど船を破らんとせしが、我等は、必死に働きて、無事なることを得たり。されば、此の行の愉快、此の行の苦み、我等は、今に忘れざるなり。

第十六　海水浴

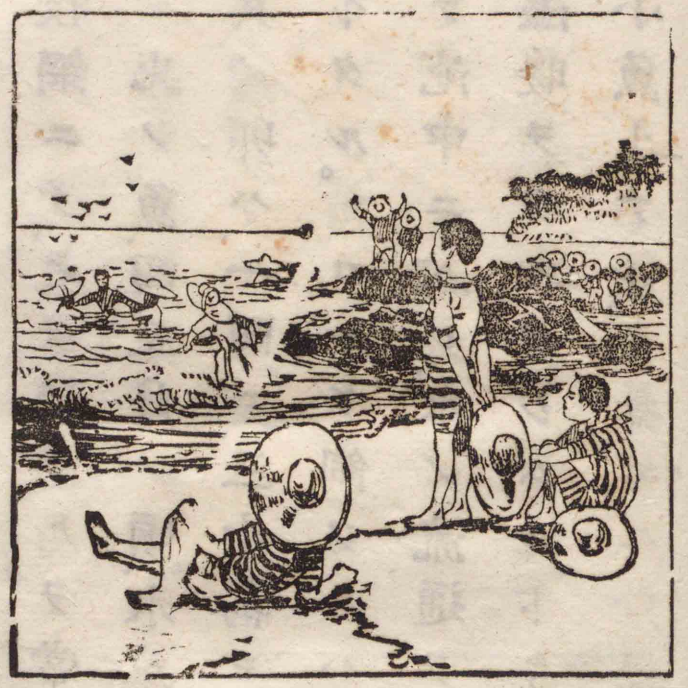
夏に至れば、海水浴に赴く人多し。海水浴は、よく疾病を治するのみならず、健康なる人の身體をも、ます〳〵強壯ならしむる効あり。海水浴場は、東南に向ひて、西北の風を受けず、氣候の變化少き、遠淺の海岸をよしとす。潮の干滿はげしく、又は、波の強くよする所は、危くして宜しからず。

海水に浴するには、大なる帽子をかぶりて、

日光をさへぎるべし。時間は、午前八時より同十一時までをよしとし、一度は、五分より三十分までの間を適度とす。強壯の人は、一日に、二三度浴するも、害なしといへども、通常の人は、一度にて可なり。

浴しをはらば、直ちにかわける布を以て、全身をこすりつゝぬぐふべし。

始めて、海水に浴するときは、皮膚赤色となりて、かゆみをおぼゆることあり。これ鹽分のはたらきによるものなれば、日をふるに從ひて、おのづからいゆべし。



海水に浴しをはりて、木かげを散歩し、清き小ざしきに起き卧して、海邊の新らしき空氣を吸ふは、まことに樂しきものなり。

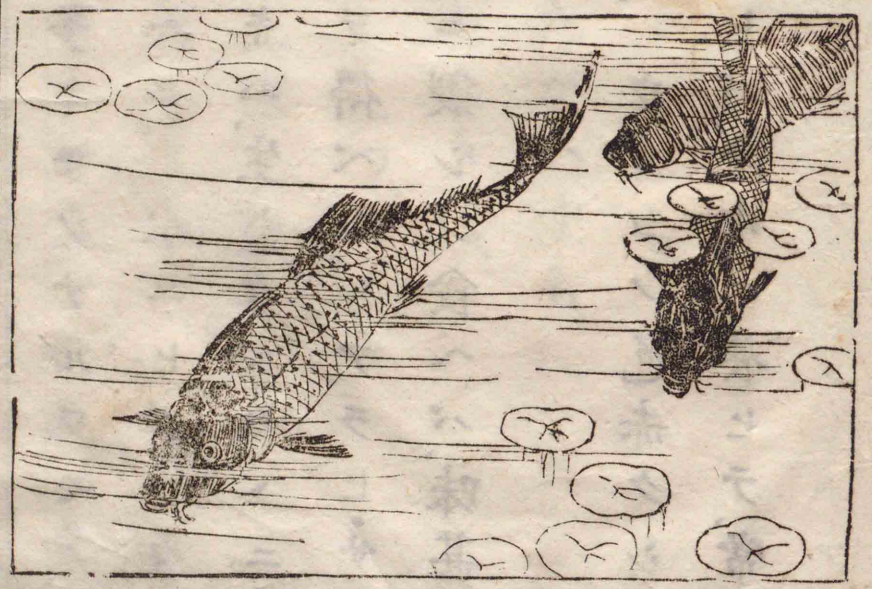
第十七　鯉

鯉ハ、我ガ國各地ノ河湖ニ產ス。釣リ、又ハ投網ニテ、之ヲ捕フルヲ常トス。

此ノ魚、四五月ノ頃、水草ニ卵ヲウミツク。其ノ卵ハ、一回ニ、三十萬ヨリ、七十萬ノ多キニイタル。コレヲ飼フニハ、卵ノツキタル水草ヲ池中ニ入レ、水ノ流通ヲヨクシテ、ホドヨキ溫暖ヲタモタシムルトキハ、三四箇月ニシテ小魚トナル。

コノ小魚ヲ養フニハ、始メ、雞卵ノ黃ミヲ與ヘ、ヤウヤク生長スルニシタガヒ、ボウフリ・ミジンコ・蠶ノサナギ、又ハ米麥ノ粉ナドヲ與フベシ。

鯉ハ、河魚中ノ上品ナルモノニシテ、價高シ。飼ヒ方ヨロシキニカナ



ヘバ、容易ニフエテ、利益多キモノナルヲモテ、近來養鯉ノ業、各地ニ行ハル。水ニヒタシタル水草等ニテツヽムトキハ、生キタルマヽニテ、遠隔ノ地ニ送ルコトヲ得ベシ。アラヒ・サシミ、又ハ味噌吸物ナドニ製シテ食ヘバ、味甚ダ美ナリ。

鯉ノ一種ニ、鯡鯉アリ。ウロコノ色赤クシテ、外見甚ダ美ナリ。サレバ、池中ニ養ヒテ、常ニ愛玩ニ供ス。

第十八　手ノ働

太刀うちふりて　たゝかふも、
鋤鍬とりて　たがへすも、
心のまゝの　はたらきは、
我が身にもてる　ふたつの手、
めくらにおしに　つんぼうは、
耳口まなこの　用をきへ、
手にこそかはりを　せさすなれ。

人ニシテ、兩手ヲ使用スルコト、誠ニ宜シキヲ得バ、何事カ成ラザラン。劍ヲフルヒテ戰ヒ、鋤ヲトリテ耕シ、筆ヲトリテ書キ、算盤ヲトリテハジクハ、ミナ手ノ働ナリ。

空ニソビエル宮殿・城郭、海ニ浮ベル軍艦・商船モ、ミナ手ノ働ニヨリテ成レリ。大ナル蒸氣機關、小ナル時計細工、イヅレカ、手ノ働ニヨラザル。飲食・衣服・日用百般ノ器物、手ノ働ニヨラズシテ、成レルモノハ、一モアルコトナシ」。

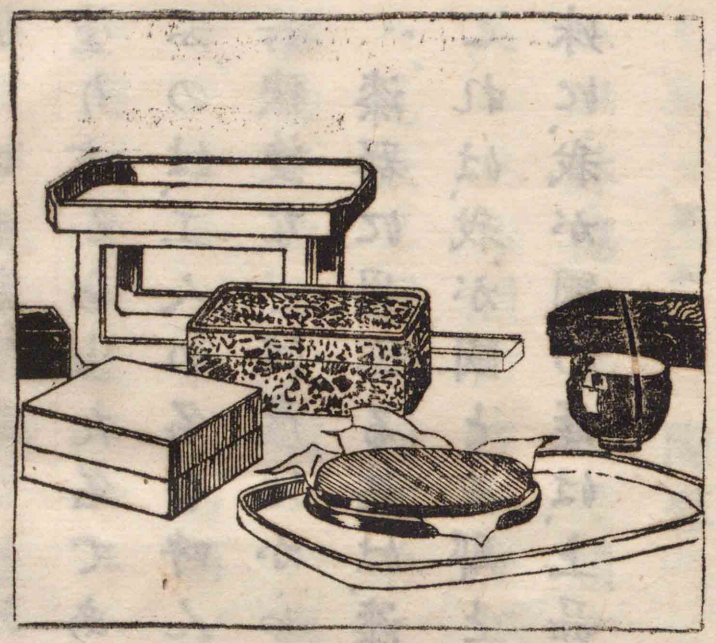
手ノ働多キコト、此ノ如シ。サレバ人ハ、手ノ働ヲ、自由ナラシメザルベカラズ。モシ、其ノ働、不自由ナル時ハ、何ノ業ヲモ、爲スコトアタハズシテ、手ノナキカタハト同ジカルベシ。

第十九　漆器

膳・椀・重箱・硯箱・菓子器・文臺など、すべて漆で塗った器具の類を、漆器といひます。この製作は、昔から、我が國の特に長ずる所なので、外

國人も頗る稱美するといふことであります。」

漆器の製法は、まづ初めに、其の木地をえらぶことが肝要であります。其の木地は、何が良いかと言ひますに、よく乾いた檜の木が、第一であります。漆を塗りますには、先づ木地に麻布を著せて、地塗りをなし、其の上を、砥石か又は柔かな炭で、幾回となく研き立て、そして後に、上塗りをして、再び研ぎ上ぐるのであります。けれど、これは、本塗りと稱する方法



であって、價の廉な品は、此の手數を省いて製するのも、少くはありません。

漆器の名は、塗り方で呼ぶのが多いのでありますが、產地や工人の名を取って、呼ぶのも、少くはありません。純黑なものを眞漆、

赤いのを朱漆、青に黄のまじったのを青漆といふのや、蒔繪・梨子地・堆朱などといふのは、皆塗り方から出た名でありますが、春慶塗といふのは、工人の名を呼んだので、會津塗・輪島塗・若狭塗などは、産地から取ったのであります。」

漆器に用ふる漆は、漆の木の液であります。これは、我が國と支那との名産でありますが、殊に、我が國の産は、上品だといひます。

第二十　陶器

皿・鉢・德利・茶碗ノ類ヲ總稱シテ陶器トイフ。又コレヲ瀬戸物ト呼ビ、或ハ唐津物ト唱フルハ、尾張ノ瀬戸村、肥前ノ唐津ナドニテ、是等ノ器物ヲ多ク製造シテ、國中ニ賣リサバキショリ、ツヒニ一般ノ名稱トナリタルナリ。

陶器ヲ製造スルニハ、マヅ、陶土ヲホドヨクネリテ、之ヲ輪車ノ上ニ載セ、此ノ輪車ヲマハシナガラ、手先キニテ、德利・皿・鉢・茶碗・花瓶、其ノ

他何ニテモ、好ム所ノ形ニ造リ上グルナリ。

サテ、既ニ造リ上グレバ、コレヲ乾カシテ後ニ、カマノ内ニ入レテ燒キ固ム。

コレヲ燒クニ、或ハ、一旦燒キ固メタルモノニ、上藥ヲ塗リ、再ビ之ヲカマノ内ニ

テ、燒クモノアリ。或ハ、最初ヨリ上藥ヲ塗リテ、燒クモアリ。彼ノ德利ナドノ、底ハ粗クシテ、其ノ他ノ所ノ滑カナルハ、上藥ヲ掛ケザルト掛ケタルトニ由ル。

陶器ニハ、種々ノ繪畫・模樣、マタハ文字等ヲ其ノ面ニ書キテ、燒キタルモノ多シ。

薩摩燒・備前燒・清水燒・伊萬里燒・九谷燒ナドノ名ハ、概ネ地名ヲ以テ、陶器ノ名トシタルモノナリ。

第二十一　瀬戸焼の祖

瀬戸焼の祖加藤景正は、通稱を四郎左衛門といふ、故に略して藤四郎と呼ぶ。今より六百四十年ばかり前の人なり。

藤四郎は、幼き時より、土をねりて物を作ることを好み、長じて陶器の製造に志しゝが、當時我が國は、其の製法、未だ開けざりしかば、道元といふ名僧に隨ひて、支那に渡り、六年の間其の地に留まりて、深く此の業を研究せり。

二十七歳の時歸朝し、肥後の川尻といふ所にて、支那より持ち來りし陶土を以て、壺三個を燒き、之を鎌倉の執權北條時頼と道元とに贈れり。其の後、諸國を巡りて、良き陶土をさがしゝかど、

心に適ふものもあらざりしが、遂に尾張の瀬戸村に於て、望める所の陶土を發見し、こゝに住居を定めて、陶器製造の業を創めたり。

かくて、瀬戸物の名、次第に世に廣まるに及び、各地より來りて、藤四郎の弟子となるもの漸く多くなれり、それより後、藤四郎の子孫、世々其の業を繼ぎ、瀬戸村數百に餘れる家々、皆此の業に從へり。此の如くにして、瀬戸の名は、遂に陶器の總稱となるに至りぬ。藤四郎の功、大なりといふべし。

第二十二　手紙

兄に贈る文

時下暑氣はげしく候處兄上様ますゝ御壯健にて御勤學成され大慶の至りに存じ奉り候當方御兩親様はじめ一同無事にくらし居り候御安心成さるべく候然れば此の項學校にて先生より御地の

話を承り候處より切に實地の景況一見致し度候に付御序の節御地名所の寫真色々御求めの上御郵送下され候樣願ひ上げ奉り候學校の朋友にも相示し地理研究の一助とも致すべく候

第二十三　職業

人は、我が身を保ち、家族を養ふために、おのれの志す所にしたがひて、生計を營む。これを職業といふ。

職業には、多くの種類あれども、大別して農・工・商の三種とす。農とは、穀物・野菜を作り、蠶を養ひ、茶・砂糖を製し、牧畜をなし、材木を伐り出す等の業をいふ。

工は、農夫の作り出せる物に、製作を加ふるものにして、商は、農工の作り出せる物を、賣買するものなり。其の他、鑛物を掘り、水産物を採るなどの業もあり。

人は、生活をとぐる爲めに業を營めども、これまた、國家有用の業の一部を爲すものなれば、もとより職業に貴賤の別あることなし。

されば、日夜我が職業に勉勵して、家の爲め、國の爲めをはかるものは、すべて貴ぶべき人にして、遊樂にのみふけりて、國家有用の業を營まざるものは、賤むべき人といふべし。

實業補習讀本巻一終

明治三十五年四月十七日印刷
明治三十五年四月二十日發行

實業補習讀本　全六冊
定價
巻一、二、各金貳拾錢
巻三、四、金貳拾貳錢
巻五、六、金貳拾參錢

著作權登錄濟

文學社編輯所編纂

發行兼印刷者　東京市日本橋區本町四丁目十六番地　小林義則

發賣　東京市日本橋區本町四丁目十六番地　文學社

印刷所　東京市神田區錦町三丁目一番地　文學社工場

四尾下矣衛